

詩余ものがたり 北宋篇(七)

—清・葉申薌『本事詞』—

八十七、幼卿

宣和年間、陝府の駅の壁に、次のような書き付けがありました。

「幼卿は幼い時、母方の従兄と一緒に学び、学問のよしみで気持ちを通じ合わせました。まだ成人しない時、従兄は結婚を約束したいと思いましたが、両親は、従兄がまだ仕官していないことを理由に、その求めに難色を示し、武官に嫁がせたのでした。従兄はたちまち科擧に合格し、洮房で教授の職につき、夫も陝西西部で兵を指揮し、二人はここでめぐりあったのです。従兄は馬に鞭を当て、振り返りはしませんでした、どうして以前の心残りを押さえることができましようか。そこで「浪淘沙」を作り思いを寄せて次のように言いました。

見送る楚の雲は空しく、

以前のことは跡も無く、

いたずらに留まる昔の恨みを眉に閉じ込める。

蓮の花が咲くのは遅く、

ひとり春の風に背をむける。

旅の宿で 風に吹かれて転がる蓬の、

松尾肇子

あわただしく集まり散るのを笑い、  
鞭を振り上げてはみたが、どうして葦毛の馬を駆けさせるのに耐えられようか。

夕陽を見はるかしてもその人は見えず、  
袖にはいっばいに涙に紅が融ける。

八十八、吳淑姬

吳淑姬は、良家の子女の中でも賢い者です。「陽春白雪」という詞集があり、彼女の良いところは李清照(字は易安)にもひけをとれません。「祝英台近」の一首は、とりわけ当時称賛されました。その詞は次のようなものです。

おしろいの痕は消え、

楽しい便りは絶え、

よい夢も久しくあてにならない。

二日酔いで心楽しまず、

枕に横になって春の雨を聞く。

はらわたをちぎられるのは折れ曲がった屏風、

あたたかに上る沈香のけむり、

どれも昔、あの人を迎えた時に見たままだから。

久しく離ればなれに阻まれてゐるけれど、  
思っているに違いない、小さな一つの心の、  
寂しい愁いはどれほどかと。

こっそりと菱花のかたちの鏡に映せば、  
きよらに痩せて自分で見るのも恥ずかしい。

どうして耐えられようか、梅の実がすっぱくなる頃、  
やなぎの綿がとぶのに。

飛び交う鶯が鳴いて、春の過ぎていくのをせき立てる。

### 八十九、飛紅

王通判の飛紅という妾は、顔立ち美しく文筆も巧みでした。次のような詞を作りました。

花が垂れ下がりウグイスが赤い花を踏み散らす、  
春の心は重たく、ふと何もかも面倒になる。

やなぎの綿の中、夢から覚めれば、楚の国の雲は重く広がり、  
空しく引き起こされる、

限らない思い。

傷ついた心はしっかりとつなぎ止められていることに漸く気がついたらけれど、

どうしよう、愁いの思いは、小さな心に結びきれないのを。  
深いまごころも空の果てに届けるすべは無く、

聞いてみたい、

梁のあたりの燕に。

詩余ものがたり 北宋篇（七）

### 九十、陸藻

陸藻（字は敦礼）には、美奴という名の侍女がおり、上手に詞を作り、お酌に出しますと、たちどころに作ってみせたのでした。「卜算子」を作ったように言いました。

私を送って東の門を出、

急いで長安への道で別れた。

兩岸のしだけ柳は暮れ方のもやを閉じ込め、

おりしも秋の光は弱まっていく。

一曲の古陽関、

金の酒樽を傾けるのを惜しんではならない。

君は（南の）瀟湘へと向かい、私は（北の）秦に向かう、

（手紙を運ぶ）魚も雁もいつやってくるだろうか。

〔如夢令〕には次のように言いました。

日暮れに馬はいななき、人は立ち去り、

船は清らかな波が東へと注ぐのを追いかける。

真夜中過ぎの高樓の最上階で、

まだ人を恋しく思ってくれるだろうか。

味気ない、

味気ない、

黄昏に雨がそぼふるのが憎らしい。

詩余ものがたり 北宋篇（七）

九十一、楊思厚

鄭義娘は、楊思厚の妻です。金が南下して侵入してきた時、撒八大尉が盱眙の町を攻撃し、掠奪されましたが、辱めを受けることなく死にましたが、魂はいつもさすらっていました。のちに楊思厚が燕山に使用に行った時、その埋葬された場所を訪れて、会うことができ、〔好事近〕に次のように書き留めました。

過ぎ去った事を誰と語ろうか。

言葉も無く清らかな血涙をひそかにぬぐう。

いっただろうか 最もはらわたが引きちぎられるのは。

それはたそがれの時節。

楼の手すりに身をもたせ目をこらして眺めては又うろろと歩く。

だれがこの切なる思いを分かってくれるだろう。

どうすれば帰って行く雁とともに、

江南の春の景色にむかうことができるだろうか。

九十二、蔣興祖の娘

靖康の変のとき、陽武県の長官だった蔣興祖はそこで死にました。

その娘は捕虜となり、雄州に至って、「減字木蘭花」詞を壁に書きました。

朝の雲が横たわり、

ギーギーという車の音は 水が流れ去るようだ。

白い草 黄色い砂、

月はぼつんとある村の二三軒を照らす。

白鳥が飛びすぎていく、

愁いに満ちたはらわたを百度も結んで 昼も夜もない。

だんだんと燕山に近づき、

振り返っても故郷への帰り道をたどることはできない。

九十三、琴操

琴操は、錢塘の軍営の芸妓でした。賢くて学もありました。湖での宴席に出た時のこと、郡の役人が間違って秦觀の「山は微かな雲をほき」の詞を間違って「角笛の音色が斜陽に消える」と歌いました。琴操が「譙門ですよ、斜陽ではございません」と言いますと、役人はかかって「おまえは陽の押韻に改作できるか」と言いました。琴操はほとんど考えることなく、すぐに次のように歌いました。

山は微かな雲をほき、

天は衰えた草にはりつき、

角笛の音色が斜陽に消える。

しばし旅の馬を停め、

しばらく別れの杯をとともに飲もう。

蓬萊での多くの過ぎ去った出来事、

空しく振り返れば、もやがもうもうと立ちこめるばかり。

ぼつんとある村では、

寒々とした鴉がたくさんの点になって飛び、

川は赤い堀をめぐって流れる。

魂は傷む。

このときにあたって、  
羅のひもをそつと分け与え、  
香袋をひそかにはずす。

手に入れたのは妓楼での、

とんでもない浮気者の名だけ。

いまここを立ち去ればいつ会えるだろう、

襟にも袖にも、むなしく残り香がしみている。

心痛めるとき、

高い城壁がとりまく町を目の届く限り望み見る、

灯がまたたいてすでにたそがれ。

東坡（蘇軾）はこれを聞いて称賛しました。琴操は後に髪を落して  
尼になったと言います。

#### 九十四、陳鳳儀

成都の長官の蔣龍図が中央に召され、郡では送別の宴を催しました。  
そのとき楽妓の陳鳳儀が宴にはべっておりました、自分で作った「洛陽春」を歌ってはお酌をしました。それは次のようなものです。

蜀の川は春の色も霧のように濃く、

二枚の旗指物を守って帰って行く。

海棠もあなたと別れがたいのか、

ひとひら ひとひらと、

泣いて紅い雨を降らせている。

これから馬はどこへ去っていくのか。

砂っぽい堤の新しい道へと向かう。

詩余ものがたり 北宋篇（七）

玉林で宴席を賜って花を愛でるとき、  
まだ西の高楼を、  
覚えていてくれるだろうか。

蔣氏は大いに誉め、厚く褒美をとらせました。

#### 九十五、尹温儀

成都の官妓である尹温儀は、元は良家の娘でありましたが、良民の  
身分を失い妓女となってしまいました。あるとき郭將軍の宴席で、  
「玉楼春」を献上して次のように歌いました。

浣花溪のほとりでは風と光とがあるじで、

桃源郷で宴をひらいて幕府を始めた。

商岩はもとより長雨を降らせる人で、

ひっそりと咲く花をも雨露で濡らす。

父の家は代々儒学を伝えていたのに、

どういうわけか身を持ち崩してその仲間ではなくなった。

もしもお教えを蒙り筆をとって力添えしてくださるならば、

刺繍した女の部屋へひらひらと飛ぶことをお許しいただきたい。

郭將軍は即刻楽籍から外すことを許可したのでした。

#### 九十六、蘇瓊

蘇州の官妓である蘇瓊は九番目でした。蔡京（字は元長）が道すがら  
蘇州に立ち寄りますと、長官は宴席を催し、蘇瓊も酒席に待りました。

詩余ものたり 北宋篇（七）

た。蔡京は蘇瓊が詞を作れることを聞いていましたので、即席に詞を献じるようにと命じました。押韻を指示してくれるよう蘇瓊が頼みましたので、蔡京はその順位の「九」を韻字としました。蘇瓊は即座に次のように歌いました。

韓愈の文章は天下に名高く、  
謝安は風流この上ない。

この良い日に西楼で宴が開かれた、  
大杯一杯の香りよい酒を勧めよう。

南の宮殿で合格者が発表されたとき、  
兄弟で首席合格を争ったことを覚えていいる。

金の香炉からは玉の御殿にめでたい煙が立ちのぼり、  
その名は第一組第九位にあったのだ。

蔡京は大いに喜びました。それは蔡京と弟の蔡卞とは一緒に科挙に合格し、蔡卞が十一位、蔡京は第九位だったからなのです。

九十七、聶勝瓊

長安の妓女であった聶勝瓊は、詩文を上手に作り、後には李之問に嫁ぎました。別れを思い出して作った〔鷓鴣天〕があつて次のようなものでした。

玉か花かのような面差しに悲しみ愁いをたたえて鳳城を出ると、  
蓮花楼の下には柳が青青と揺れていた。  
酒を前に別れの陽関の曲を歌った、  
別れたあの人は遠い旅路にある。

好い夢を探そうにも、

夢は結び難く、

私のこのときの思いを誰がわかってくれようか。

枕の涙は階段に降る雨とともに、

窓を隔てて夜明けまでしたたり落ちる。

思うに外地に送った作品でしょう。

九十八、覚範

僧侶の覚範が〔西江月〕を作つて女性の道士に贈つたことがあります。それは次のようなものです。

十本の指は柔らかく出たばかりの筍のよう、

ほっそりとした玉を赤く染めて柔らかだ。

人の前で見せようとすると愛らしく恥ずかしがり、

雲の衣の虹の袖からそつと示す。

最も好ましいのは仙人の住む洞天の春の明け方、

黄庭経を巻き終わる静けさ。

凡人の心はしずかな愁いをどうすることもできず、

試みに梨の花をつまんでしきりに香をかいでみる。

この坊様もまた大いにおおらかでこだわらないお方です。

九十九、仲殊

僧侶の仲殊がある日役所の法廷に出かけ、席に近づきますと、書き付けを差し出し、雨にうたれるまま立っている婦人がいました。長官が仲殊にこれを詞に詠じるようにと命じたところ、仲殊は即座に〔踏莎行〕を口から唱えました。

ぐっしょりと衣をしみ通り、

ひそかな香がひるがえり、

雨のなかの花は疲れしおれた色を増す。

枇杷の木の下にじっと立ち、

何も語らず弱々しい。

眉のあたりには新たな愁い、

手の中の文字を、

どういうわけで魚や鳥に託して送ろうとしないのか。

ただ薄情な男を訴えようとしているだけなのに、

役所のだれも取り上げようとししないのだ。

仲殊は後に枇杷の木に首を吊りましたが、誰もが口が招いた災いだと思っただけのことです。

(北宋編 完)